

プラスチック問題の身近に潜む危険，対策の啓発

身近な生活環境研究委員会

プラスチックは私たちの生活にはもはや欠かすことのできない素材であるが，生活の場から離れたプラスチックは川や海等を介して環境中に広く分散し，生態系へ大きなダメージを与える。分解物のマイクロプラスチックも生物に摂取されるため，私たちの健康への悪影響も懸念される。当研究委員会では身近に潜むプラスチックの危険について認識し，対策についての理解を深め，よりよい啓発について考えることを目的として4題の講演と総合討論からなるセッションを開催した。

プラスチックの現状と課題

小寺正明（環境・国際研究会）

冒頭に1950年以降に劇的に生産量が増加したプラスチックに関し，海洋への流出量や海洋汚染，生態系への影響，大気中からも検出される事実等を幅広く紹介した。続いて身近に潜む危険としてプラスチックに含まれる添加剤や有害物質吸着の問題，人体からの検出事例を取り上げ，健康影響の可能性を示した。身近なプラスチック問題への対策は減プラスチックが基本であるとし，様々な対策の実践例や方法を提示した。また，演者はプラスチック問題の啓発活動を実践しているが，その中での課題についても触れた。

プラスチック環境調査事例から（遠賀川）

原口公子（遠賀川流域住民の会）

遠賀川流域における3つの調査について報告があった。ゴミの質と量に関する流域の調査では，ゴミの量は地域により異なり，自動車によるアクセスの容易かつ人目につきにくい状況では多くなり，また，プラスチックの他，缶や瓶も多い傾向にあるとした。河口堰魚道における毎月のマイクロプラスチック調査からは農業用カプセルが多数検出される月があり，雨による農地からの洗い出しの影響であろうと考察した。最後に演者の属する団体会員に対するプラスチック削減生活に関するアンケート調査結果を報告し，取り組みの実施率が高いものとしてゴミの分別回収等が上位を占め，全般的に男性より女性，若年層より高齢層でより高い傾向にあるとした。

プラスチック分析の視点から（人工芝，飲料缶，紙パックを例に）

向高 新（立正大・地球環境）

飲料缶や紙パック容器には塗料やフィルムとしてプラスチックが使用されている。絶対的な質量はペットボトルに比べて少ないが，河川のゴミ拾い活動でそれらが多

く回収される荒川のような河川では無視できないプラスチック負荷量であることを示した。また，人工芝グラウンドからのプラスチック流出量を調査した結果に基づき全国での負荷量へのスケールアップも試みた。マイクロプラスチックを構成するゴムチップに関しては不確かさが残るものの，全国の人工芝より流出するプラスチックは相当量に上ることを指摘した。

北上川流域での多主体連携・協働過程に見る水環境保全成功の要因と課題 塚本善弘（岩手大・人文社会科学）

北上川では1990年代に国の働きかけと市民有志の熱意で独立して活動していたNPOがネットワーク化され，川へにぎわいを取り戻す各種活動が展開した。これに並行し，川を軸とした地域づくりを目指すべく市町村協議会も組織化された。北上川河口域にはヨシの群生地があり，漁業も盛んだが，河口漂着物や濁水の問題があり，上流側に責任があるとされた。岩手県内の行政・住民に河口漂着物の実態を認識してもらうため，官民連携による上・下流間交流，河口清掃，源流植林活動等が実行された。人的交流や意識改革が機縁となり環境改善につながったが，これは多主体連携による成功例でもあった。一方，市町村の連携は平成の大合併や首長の交代等で弱体化し，東日本大震災がもとで解散。NPO側の北上川流域連携・交流活動も一旦，休止状態となった。現在は双方とも再建途中にあるが，それぞれが困難を抱えており，組織維持の課題も明らかとなった。

総合討論

総合討論では北上川での取り組みとマイクロプラスチックの啓発活動を対比しながら議論を行った。北上川流域の活動ではマスコミの発信力を活用した広報に加え，小学生や幼児を含む幅広い世代の参加を促す仕組みがあったこと，それを支援する国・地方公共団体があり，上流域の取り組みが下流域の環境改善に効果があるという実感を持ちつつ活動ができたことが明らかになった。一方，プラスチック問題は，個々人の努力の効果を感じ，自己効用感を得ながら活動することの難しさが指摘された。多くの人に関わってもらうためには，川遊びを伝えるような楽しい中で，多世代が関わることのできる仕組みと，大学生等若い指導者層の育成が重要であること，などが議論された。

（大阪市立環境科学研究センター 大島 詔）